さかまた

鴨川シーワールド　NO. 30

シーワールドのアニマル達

●5年目をむかえたセイウチ

当館に来てから、5年目をむかえた2頭のセイウチ・タック（オス）とムック（メス）は、最近では「セイウチにさわろう！ムックにタッチ」のコーナーに出場し、連日お客様とのスキンシップに活躍しています。初めてセイウチにさわったお客様からは、「ワー！大きい」「すごいなー」などの感激の声があがっています。搬入当初、体長130㎝、体重100kg程で、まだミルクを飲んでいた2頭のセイウチは、今では鴨川の気候にもすっかりなれて、ムックは体長220㎝、体重430kg、タックは体長230㎝、体重550kgに成長して自慢のキバやヒゲも長くなり、毎日シシャモやサバを20kgも食べています。しかし、からだこそ大きくなりましたが、甘えん坊とイタズラ好きは相変わらずで、特にムックは長いキバでプールの中のペンキ等をはがし、係員をてこずらせています。

セイウチは北極海周辺に生息し、成長するとオスは体長360㎝、体重1.6ｔ、メスは体長300㎝、体重1ｔにもなります。顔には6～700本のヒゲと90㎝にもなるキバを持ち、海では主として二枚貝を食べています。

セイウチは、日本では現在当館の2頭を含めた4頭しか飼育されていませんが、自然界における生態等については、まだ不明な点が多く残されているため、当館ではムックとタックの2頭のセイウチを、これからも大切に飼育し、多くの事を学んでいくつもりです。　（金野）

▲セイウチ　*Odobenus rosmarus*

●“ふとめのアイドル”イシガキフグ

イシガキフグは、体をふくらませると全身が長いとげで覆われ、まるで「いがぐり」のようになることで知られているハリセンボンの仲間で、太平洋の温帯から熱帯海域のサンゴ礁や岩場に生息し、成長すると体長は50センチになる魚です。

泳ぎかたは大変のんびりしているため、水族館で餌を与える時などには、一緒にいる魚達に横取りされてしまう事もしばしばあり、時には餌を口の中に入れてやることもあります。この時、うっかりするとフグ類独特の強力な歯で指を噛まれることがありますが、大きな愛らしい目をした顔をみていると怒る気にはなれません。

イシガキフグは他の魚達とは異なり、見る角度によって実にいろいろな顔をもっています。正面からは、大きな丸い目と大きな耳のような胸ビレから、笑っている顔に見え、横から眺めると、目の下にある縞模様が涙を流しているようで、泣き顔に変わります。また斜め上からは、少し怒った顔にも見えます。皆さんもこのちょっと太めのアイドル・イシガキフグをゆっくりと観察すれば、新しい顔を発見することができることでしょう。　（小坂）

▲イシガキフグ　*Chilomycterus affinis*

さかまた No.30　（禁無断転載）
編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日　昭和62年12月

イルカ 海 から水族館へ

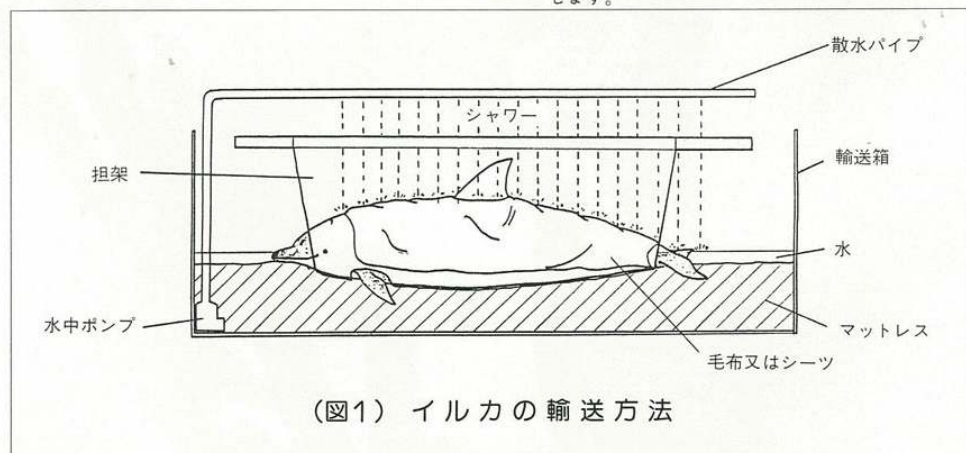
水族館で華麗な演技を披露してくれるイルカは、どのようにして水族館に運ばれて来るのでしょうか。今回は、このイルカの輸送について紹介いたしましょう。

現在、日本の水族館では、11種類約300頭のイルカが飼育されていますが、この内シャチ、ベルーガ、イロワケイルカ等の外国産３種類を除く８種類は全て日本近海産で、その殆んどが、漁師によって生け捕られたイルカです。水族館では、漁師からのイルカ生け捕りのニュースを受けると、ただちに数名の係員を捕獲場所へ急行させ、輸送道具を積んだトラックも、その後を追い掛けるように出発させます。

輸送用のトラックと水族館の係員が、捕獲場所に到着すると、海からトラックへとイルカを取り上げる作業が開始されます。トラックの上では、イルカを運ぶ為の長方形の箱型コンテナーにマットレスと水が入れられ、イルカ取り上げ用のタンカも降ろされます。そして、水族館用に選ばれた年齢の若いイルカだけが、海から１頭ずつタンカに乗せられてクレーンで吊り上げられ、トラック上のコンテナーに入れられます（図１）。この時から約１時間の間が、係員にとって最も神経を使う時です。海の中では、浮力だけに頼っていたイルカは、海から吊り上げられた瞬間に生まれて初めて経験をする重力の影響を受け、新しい環境に耐えきれず、心臓麻痺によって死亡することが多いからです。

▲輸送中イルカに毛布をかけて体温の低下を防ぎます。

▲イルカは水から上げられ生まれて初めて重力を体験します。

（図1） イルカの輸送方法

―輸送方法―

▲尾ビレや胸ビレのしびれがとれ、泳げるようになるまで係員が付添います。

コンテナーに入れられたイルカには、まず初めて経験する重力からのショックをやわらげるために、精神安定剤の注射が打たれ、長い旅の間にかかりやすい輸送性肺炎の予防のために、抗生物質の注射も打たれます。続いて、体表の乾燥により全身火傷にならないよう、体にビタミン剤を含んだラノリンやチンク油などのスキンクリームが塗られます。また、水から上げられたイルカの体温が上昇して、内臓障害をおこさないように、いつも体に水をかけているための散水装置がセットされます。長い輸送中には、イルカ自身の体重によって内臓圧迫もおこるので、この障害はコンテナーの中に入れられた水とマットレスによって防ぐと共に、狭いコンテナーの中でヒレや体に傷が付かないよう、体の周囲にマットレスや毛布が挟みこまれます。出発前の短い時間に、これだけの作業を行わなければならない係員にとっては、まさに目のまわるような忙しさです。

全ての準備が完了すれば、いよいよ水族館に向かって出発です。イルカの輸送は、理想的には10時間以内がイルカにとって最も安全な輸送時間なのですが、生け捕られた場所によっては、30時間以上にもなることがあります。このような場合には、係員は徹夜作業を覚悟しての道中となります。輸送中には、体温や脈搏、呼吸数などを、30分間隔でチェックをしてイルカの状態を観察したり、トラックの揺れから起こる姿勢の傾きをなおしたりしながら、係員は休む暇もなくイルカの世話を続けます。長い輸送中には、馴れた係員でも車に酔うことがありますが、イルカも人間と同じようにしばしばトラックに酔うことがあり、イルカにとっても輸送は楽な旅とはいえません。

長い旅も終わり、無事水族館に到着したイルカは、クレーンを使いプールの中に放たれます。プールに放たれたイルカは、すぐに元気良く泳ぎ出してくれることもありますが、長い旅により体がしびれて泳げないこともあります。しびれているイルカは、尾ビレや胸ビレのしびれを完全に回復してやらなければ溺れてしまいます。このような時には、係員はイルカに寄り添い、泳ぎ始めるまで、何時間もプールの中ですごすこともしばしばあります。

このようにして、無事に海から水族館へ引っ越しの終わったイルカは、新しい環境のプールや餌に馴れながら係員との信頼関係を作りあげ、訓練によってスターへの道を歩み始めるのです。

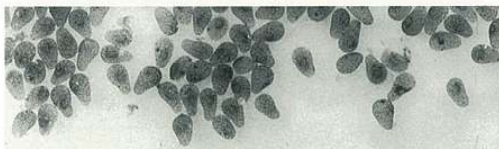
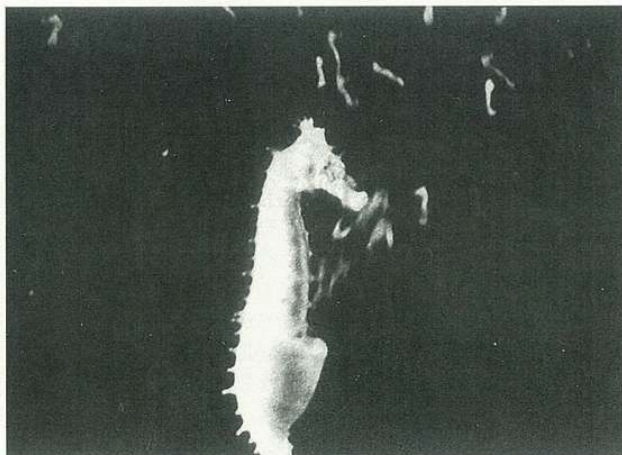
（岡田）

トピックス イバラタツの誕生

▲イバラタツ *Hippocampus histrix* の親と子供。小さくても親と同じ形をしています。

タツノオトシゴ（竜の落し子）は、その姿・形が特異なことから、空想上の動物である竜の子供のように見える、ということから名付けられた動物で、昔の学者は、この動物の分類学的位置を決めるのに頭を悩ましたそうです。しかし、よく観察すると、エラ、胸ビレ、腹ビレがついていて、魚だということがわかります。

イバラのトゲに似た突起を、体表に持つタツノオトシゴの仲間のイバラタツは、暖かい海に住んでいます。水温25℃で、アミ、エビなどの生きた小動物を与えて飼育すると、他のタツノオトシゴと同じように、メスがオスのおなかの袋（育児のう）に卵を産みつけ、その袋の中で卵がフ化し、オスが子供を産むという、一風変った産卵習性をもっています。おなかから飛び出した子供達は、すでに大きさ0.8㎝で親と同じ形をしていて、カンガルーのように再び親の袋に戻ることはありません。イバラタツが、１回に産み出す子供の数は100～200尾で、産卵からフ化まで15～17日を要します。

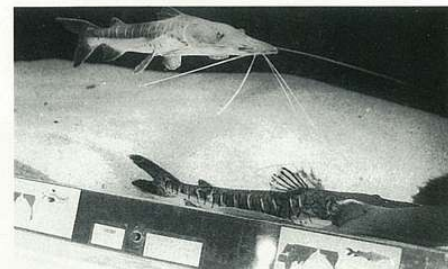
当館は、昭和55年に日本動物園水族館協会より、「イバラタツの繁殖」の飼育業績に対して表彰されましたが、来年の干支は「辰」ということもあり、なお一層、タツノオトシゴ類の飼育に力を注いでいくつもりです。（津崎）

▲イバラタツの卵。オレンジ色で西洋ナシ形をしています。(目盛は1mm)

▲イバラタツの産出シーン。オスのお腹の袋から子供が飛び出します。

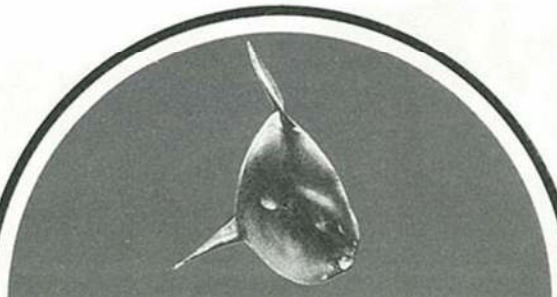
おしゃべりなさかなたち

～ほら、さかなたちの鳴声が聞えるよ～

魚が鳴き声を出すことを御存知ですか？　今年の7月から、パノリウム入口の特設水槽で、「おしゃべりなさかなたち」というコーナーを開設しました。鳴き声というと、口から出していると思われがちですが、魚たちは「ヒレ」をこすったり、「うきぶくろ」をちぢめたり、ふくらましたりして音を出しているのです。今回は良く音を出すことで知られている魚たちの中から、イシモチやフグ、ナマズの仲間など６種類を選び、魚とその声を聞いてもらえるように展示に工夫がなされています。

魚たちは、いつも鳴いているのではなく、外敵から身を守ったり、相手をおどろかせたり、同じ仲間たちと連絡をとる時にだけ音を出します。そこで、来館者がいつでも鳴き声を聞くことができるように、鳴き声をあらかじめテープに録音しておき、それぞれの水槽の前にあるボタンスイッチを押せば、魚の鳴き声がスピーカーから流れるようにしてあります。また同時に、魚の形を表示し、その魚の音を出す場所を、ランプの点灯によって知らせるようにもしてあります。お客様の中には、魚たちの出す音にたいへん興味をひかれ、何回も繰り返し聞いているお客様も数多く見られました。（森）

▲ボタンを押すと水槽の上と下のスピーカーからさかなの鳴き声が聞こえてくる。

▲ナマズの仲間は胸ビレで音を出す　シャベルノーズキャットフィッシュ *Pseudoplatystoma fasciatum*

▲開設された「おしゃべりなさかなたち」コーナー

●シャチのシャワープレゼント

オーシャンスタジアムで人気を博しているシャチショーは、昭和45年に当館がオープンした時、我が国で初めて公開されました。その時に、演じられた数々の芸の一つが、〝歯みがき〟や〝火消し〟の場面での「うがい」です。この芸は、今のショーの中では、ステージ上のトレーナーに水を掛ける芸として演じられており、今夏の催し物の一つとして取り上げたのが、「シャチのシャワープレゼント」です。プール前面のガラス越しに、シャチがスタンドにいるチビッ子達に向かって「うがい」をし、最も水の掛かった子には、Tシャツをプレゼントしましたが、なかなかの人気でした。このような、動物と触れ合うような催し物を、今後も続けていくつもりです。

（大島）

●虹の水槽

水槽の照明が突然消え、ゴロゴロという雷の大音響と共に、稲光がひかり、スコールが過ぎ去った後には、美しい虹があらわれる、そんなユニークな展示水槽が7月に完成しました。

これは、海水系のパノリウム水槽の一部を利用して、海水が蒸発し雲となり、雨となって海に戻るという、いわば「水のサイクル」を、短縮してご覧いただけるように展示したものです。

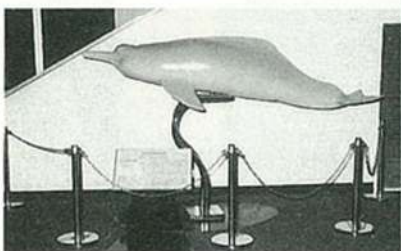
水中に住む生物を、展示するばかりではなく、彼等を取り巻く色々な環境をも展示するのが、パノリウム水槽です。これからも、分かりやすく、そして楽しい展示を試みていきたいと思います。

（森田）

●アマゾンカワイルカのFRP標本

アマゾンカワイルカ（愛称ポコ、性別雄）のプラスチック複製標本が、完成し展示されました。このアマゾンカワイルカは、昭和45年の開館以来飼育されていましたが、昭和61年4月、16年間の飼育記録を残し、残念ながら死亡しました。そこで、日本では当館でしか飼育されていなかった、この希少動物の複製標本を作成し皆さんに見てもらう事にしました。

複製標本作成にあたっては、プラスチック（FRP）を使用して、出来るかぎり生存中の姿を再現することに心掛け、何回も修正が行われました。そのかいがあり、完成した複製標本は、学術的にも価値がある当館の貴重な資料の一つになりました。

（前田）

●海の動物供養祭

9月23日（水）、動物愛護週間にちなみ、園内「慈愛の碑」前において、総支配人、副総支配人をはじめ関係社員多数が参列し、供養祭が行われました。当日は天候にも恵まれ、厳粛な雰囲気の中、式次第にのっとり宮司さんによる神事がすすめられ、代表による玉串奉奠などが行われた後、最後に萩原社長から贈られた花輪が動物展示課員2名によって献花されました。そのあと、引き続き永年飼育動物の表彰式が行われ、飼育動物を代表して、アシカ、ペンギンに感謝状が贈られ、アジやイワシなど好物の餌が、一般客を含む参列者からプレゼントされました。また、飼育世界記録更新中のマンボウ「クーキー」にも、魚類を代表して特別表彰が贈られました。

（村田）